

令和元年6月7日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21658

研究課題名(和文)近代日本における戦時精神医療体制 国府台陸軍病院と傷痍軍人武蔵療養所を中心に

研究課題名(英文) A study on military psychiatry in modern Japan: Kohnodai Military Hospital and Musashi Military Sanatorium during the Asia-Pacific War

研究代表者

中村 江里 (NAKAMURA, Eri)

慶應義塾大学・経済学部(日吉)・特別研究員(PD)

研究者番号：20773451

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦時精神医療の中核を担った国府台陸軍病院及び傷痍軍人武蔵療養所の診療録(病床日誌)のアーカイブ整備を進めた上で、両機関で最も多かった「精神分裂病」患者の診療録を中心に分析を進めた。軍隊や病院・療養所における患者の処遇だけでなく、患者と家族の関係や患者の自己認識など「患者の歴史」にも光を当てることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が主に分析する診療録には、(1)兵役免除や恩給に関わる軍の行政文書、(2)医学の疾病解釈、(3)患者の言葉や家族との通信などが含まれており、戦時精神医療の構造と実態を重層的に分析することが可能である。戦時期の医療記録の生成過程には、軍隊や医学の持つ権力性が大きく影響しているが、一方で、自ら記録を残すことが少なかった患者たちの言動が記されており、「患者の歴史」を切り拓く可能性を持つ史料でもある。

また、本研究では、人文・社会科学研究者のアクセスが困難であった、医療機関が保存する診療録のアーカイブ整備を行い、終戦時に大量の公文書が焼却された中で残された貴重な記録の長期的な保存にも貢献した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I analyzed medical records of the patients diagnosed as schizophrenia who were admitted to Kohnodai Military Hospital or Musashi Military Sanatorium during the Asia-Pacific war, organizing these historical materials for the purpose of constructing the archive. This study explored how the Imperial Japanese Army and medical officers treated psychiatric patients and it also shedded light on "patient's history" such as relationship between patients and families and their self recognition.

研究分野：近代日本精神医療史

キーワード：戦時精神医療 病床日誌 医療アーカイブズ 患者の歴史 国府台陸軍病院 傷痍軍人武蔵療養所

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

20世紀の総力戦では、大規模な官僚化と、精神医学・心理学などの専門知による効率的な「人的資源」の管理が顕著となった。1970年代以降、欧米の医学史においては、近現代の戦争(とりわけ総力戦となった第一次世界大戦)と精神医療の歴史に関する研究が行われてきた。

一方、日本軍が本格的な戦時精神疾患の対策を行うようになったのは日中戦争以降のことであり、その中核を担ったのが国府台陸軍病院であった。国府台陸軍病院診療録に関しては、これまで元軍医の浅井利勇によって戦後整理・分析された複写版が、主に研究者やメディア関係者によって利用されてきた。

しかし、原本の診療録の保存状況や概略についてはこれまでほとんど知られてこなかった。また、これまでの戦時精神疾患に関する研究は、知的障がいや戦争神経症患者の分析が中心であり、国府台陸軍病院入院患者の大多数をしめていた「精神分裂病」(統合失調症)患者の分析は行われていない。さらに、国府台陸軍病院とも密接な関連を持っていた傷痍軍人武蔵療養所も含めた戦時精神医療の全体像はまだ明らかとなっていないのが現状である。

2. 研究の目的

以上の課題を受けて、本研究では以下の三点を課題とした。

- (1) 国府台陸軍病院と傷痍軍人武蔵療養所という戦時精神医療の中核を担った医療機関で作成された診療録のアーカイブズ整備を進め、精神医療史の研究環境を発展させること
- (2) 両機関の患者の大多数をしめていたにもかかわらず、従来あまり注目されてこなかった「精神分裂病」(現在の統合失調症)の患者の特性と処遇を明らかにすること
- (3) 軍隊や病院・療養所における患者の処遇だけでなく、患者と家族の関係や患者の自己認識についても明らかにすること

3. 研究の方法

以上の課題を達成するために、本研究では診療録(病床日誌)を主な史料とした。診療録には、(1)兵役免除や恩給に関わる軍の行政文書、(2)当時の医学の疾病解釈、(3)患者の言動の記録や家族との通信記録など、戦時精神医療の構造と実態を明らかにする上で重要な情報が多数記載されているからである。

国府台陸軍病院診療録(原本)に関しては、昭和18年度(昭和18年4月1日~昭和19年3月31日)退院患者733名に関して、階級、発病地、転帰、治療期間、原職、傷痍疾病等差、家族や配偶者の有無などのデータ分析を行った。

傷痍軍人武蔵療養所診療録の分析に関しては、1940年から45年までの期間に入所した817名分の診療録について、同様のデータ分析を行うとともに、患者と家族の関係や、入所者たちが療養生活や退所後の生活、そして自己をどう捉えていたかを分析した。

4. 研究成果

(1) 医療機関が保存する歴史資料のアーカイブズ整備と研究利用

本研究の第一の成果は、従来人文社会科学研究者によってあまり利用されてこなかった、医療機関が保存する診療録のアーカイブズ整備を行い、現在の医療倫理指針に沿った研究遂行のプロセスを確立したことである。

本研究では、主に国府台陸軍病院診療録(原本)のアーカイブズ整備を進めたが、その際に、既に研究開始前に代表者が関わっていた傷痍軍人武蔵療養所の診療録の事例を参考にした。本研究では、複数の関連機関の承諾を経た上で、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に基づき、研究代表者が所属する慶應義塾大学及び資料保存機関で倫理審査委員会の承認を受けた上で研究を遂行した。

国府台陸軍病院診療録(原本)のアーカイブズ整備を行った結果、戦時中に同病院に入院していた患者約1万名のうち、8割弱の患者の記録が残されていることが判明した。恐らくは敗戦前後の混乱による保存状態の悪化のために、一部激しく破損していた資料に関しては、保護措置を講じた。

資料整備を開始した段階では、1938(昭和13)年~1947(昭和22)年度の簿冊が年度順に並べられ、10数名の患者を一つの簿冊にまとめた状態で保存されていた。各簿冊は、もともとの表紙の上にさらにもう一枚厚紙の表紙がつけられており、恐らく補強用に戦後新たにつけたと思われる。簿冊数の合計は619冊(解体資料を含む)で、年度ごとの簿冊数は、昭和13年度(14冊)、昭和14年度(48冊)、昭和15年度(77冊)、昭和16年度(98冊)、昭和17年度(87冊)、昭和18年度(84冊)、昭和19年度(145冊)、昭和20年度(52冊)、昭和21年度(13冊)、昭和22年度(1冊)であった。

各年度の簿冊は、原則として退院年月日順に個々の診療録が並べられ、病名や階級が同じ患者でグループ化されている簿冊もある。簿冊の背表紙には二種類の番号が付されているが、現在のところまだ番号の規則性は解読できていない。

これらの大量の資料群のうち、本研究では、関係諸機関の承諾を得た上で、昭和18年度と

昭和 14 年度の簿冊の電子化を行い、再製本を行った。電子化データは、分厚い簿冊を一度解体し、個々の診療録ごとにファイルを作成した。その結果、製本された状態では見ることができなかった綴じ部分にも、恩給などに関する研究上重要な情報が記載されていることが判明した。

また、診療録には、戦時中の記録だけではなく、戦後患者や家族から資料請求などの要請があった際の記録なども残されており、これらの記録も、精神障がいを負った元軍人の戦後を知る上で重要な情報である。

(2) 昭和 18 年度退院患者のデータ分析と「精神分裂病」(統合失調症) 患者の特徴

本研究では、電子化したデータのうち、昭和 18 年度退院患者 733 名に関して、階級、発病地、治療期間、原職、家族や配偶者の有無などの基礎的なデータを集計した。また、「精神分裂病」(統合失調症) と診断された患者は 397 名 (全体の 54.1%) であった。

まず、患者の出身地 (原籍) に関しては、【表 1】の通り、病院近郊の関東が 3 割以上をしめるが、戦時精神疾患の特殊病院としての性質上、全国各地から患者が集められたことがわかる。

【表 1】患者の出身地

北海道・東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄	台湾・朝鮮・中国
89	245	154	86	64	26	65	4
12.1%	33.4%	21.0%	11.7%	8.7%	3.5%	8.9%	0.5%

昭和 18 年度全体の患者の階級については、兵士 (83.6%)、下士官 (5.6%)、将校 (5.2%)、軍属 (3.4%)、看護婦 (0.1%)、その他 (陸軍幼年学校生徒や士官候補生など) (2.0%) であり、「精神分裂病」患者の階級構成もほぼ同じであったが、兵士がやや少なく、下士官・将校の割合がやや大きかった。

本研究では、細淵・清水編 (2017) の資料集も補助的に用いて、「神経衰弱症」患者のデータ分析も行ったが、神経衰弱は階級が高い患者に用いられる傾向があった。それに対して、中村 (2018) では、「ヒステリー (臆病)」は階級が低い患者に用いられる傾向があることを指摘した。今後、診断の際に患者の階級という社会経済的要素がどのように影響を与えたのか、より詳しく分析する必要がある。

発病地については、昭和 18 年度全体で、多い順に中国 (26.9%)、内地 (25.1%)、南方 (17.5%)、満州 (13.2%)、帯患 (11.5%)、その他 (5.2%)、不明 (0.7%) であった。浅井 (1993) が分析を行った 8002 名の複写版の分析では、戦時中全期間を通しての患者の発病地は、多い順に中国 (39.5%)、国内 (31.8%)、満州 (13.5%)、南方 (6.8%) であった。本研究では、恩給との関係で浅井前掲書にはなかった「帯患」という分類項目も入れており、実際に精神症状が出た場所で分類し直すと多少上記の割合は変わってくると思われる。ただ少なくとも、昭和 18 年度退院患者の特徴として、南方からの還送患者が多い時期であったことは指摘できる。これは 1941 年の対米英蘭戦争の開戦の影響と、該当患者が入院した時期は、まだ南方からの還送業務を行うことが可能であったためと考えられる。

また、「精神分裂病」患者に関しては、中国 (32.0%)、内地 (22.7%)、満州 (14.6%)、南方 (20.9%)、帯患 (5.5%)、その他 (5.5%)、不明 (0.5%) であった。全体と比べると、「精神分裂病」患者は中国や南方で発病した患者が多く、激しい戦闘を経験した人々が多いと考えられる。また、今回分析した資料には再入院の患者も含まれ、患者の基礎データが記入された「一号紙」では発病地が内地や空欄になっているが、過去に戦地に派遣されたケースも散見されたため、今後精査の必要がある。

(3) 患者の処遇

患者の処遇について、まず国府台陸軍病院の昭和 18 年度退院患者の転帰と傷痍疾病等差を確認する。転帰とは、治療の結果である。また、傷痍疾病等差は傷病恩給に関わる項目であり、一等症の場合は傷病恩給の対象であったが、二等症の場合は恩給の対象外であった。

転帰については、昭和 18 年度全体で、治癒 (2.5%)、除役 (80.1%)、事故 (13.1%)、死亡 (4.3%) であり、「精神分裂病」患者についてもほぼ同様の割合であった。浅井前掲書の戦時中全期間のデータでは、治癒 (5.2%)、除役 (65.5%)、事故 (22.0%)、死亡 (6.0%) であったが、昭和 18 年度の段階では除役が 8 割と圧倒的に多い。中村前掲書でも指摘したが、戦争末期になるに従い、除役が減少し、治癒が増加する傾向があると考えられる。

傷痍疾病等差については、昭和 18 年度全体で、一等症 (39.2%)、二等症 (60.8%) であった。さらに、「精神分裂病」患者の場合は、一等症 (57.9%)、二等症 (42.1%) で、全体と比べると一等症と判定されたケースがかなり多いと言える。これまでの研究では、知的障がいや「ヒステリー」患者は恩給の対象外となりやすかったことが明らかとなっているが、「精神分裂病」や「神経衰弱」患者の分析を進めることで、病名と傷痍疾病等差の相関関係が明らかになると思われる。さらに「精神分裂病」に関して重要なのは、国府台陸軍病院の院長であった諏訪敬

三郎による終戦直後の論文では、「精神分裂病」の発病年齢が兵役年齢と重なるため、戦争の影響はほぼなかったと総括されているが、戦時中の恩給策定方針や実際の判定状況を見てみると、戦争という大きな環境の変化が人間の精神に及ぼす影響が重視されていると考えられる。この点に関しては、今後軍医の疾病解釈や恩給判定の理由について詳細に分析することで、さらに明らかにしたい。

次に、「精神分裂病」患者の処遇に関しては、大多数が国府台陸軍病院から転送され、8割近くを「精神分裂病」患者が占めていた傷痍軍人武蔵療養所の診療録からも様々なことが明らかとなった。第一に、傷痍軍人武蔵療養所の診療録には、国府台陸軍病院での治療大要に関する記入欄があり、かつ治療内容と患者の階級との相関関係が見られた。すなわち、電気衝撃療法は兵士に多く、インシュリンショック療法とカルヂアゾール痙攣療法は、士官に多く実施されている傾向があった。どちらの治療法も、当時としては最先端のものであったが、後者の方がより高価な治療法であった。また、患者にとっては侵襲性が高い治療法であったことが、国府台陸軍病院・傷痍軍人武蔵療養所双方の診療録に記載された患者の言動からうかがえる。

第二に、国府台陸軍病院や傷痍軍人武蔵療養所の食生活は、一般の精神病院よりも優遇されたようであるが、特に傷痍軍人武蔵療養所では、戦争末期の食糧事情の悪化による死亡率の上昇が見られた。敗戦前後の記録が残された265名の入所者のうち、97名は敗戦後一年以内に死亡し、うち39名は3か月以内に死亡した。死因の多くは、栄養失調に起因する内科系疾患や全身衰弱であった。

(4) 家族との関係や患者の自己認識

患者の動態で注目されるのは、戦時精神疾患を発症した患者は、戦時中を通して陸軍病院や傷痍軍人療養所に隔離されていたわけではなく、地域社会や家族のもとで生活していたケースも多かった。戦時中国府台陸軍病院に入院した患者10453名のうち、兵役免除となったのは約6500名であり、さらに武蔵療養所へ転送された患者は1000名弱であったため、それ以外の多くの患者は家族のもとへ帰った。中には、帰郷療養中に症状が悪化し、再入院するケースもあった。

国府台陸軍病院診療録に関しては、研究利用の開始までに長期間を要したため、退院後の患者の動態や家族との関係等について詳細に分析することができなかったが、今後個々の記録を詳細に分析することで、入退院の経緯に家族の意向や家庭の経済状況等がどのように影響を与えたのか、家族や地域社会の患者に対するまなざしはどのようなものだったのかを明らかにすることができると思われる。

傷痍軍人武蔵療養所診療録に関しては、診療録のうち問診内容や家族からの情報等を医師が記入した病床日誌を用いて、患者の自己認識を分析した。問診表の記録からは、入所者の多くが、退所後に戦時労働力として働くことを希望していること、それにもかかわらず、精神障がい者向けの職業保護は軽視されており、兵士としても戦時労働力としても「御奉公」できない現実に思い悩んでいることが浮かび上がってくる。このような状況は、彼らの多くが「傷痍軍人」として国家の保護を受けることに対して強い負い目を持つことにもつながった。

本研究は、利用する資料の変更、倫理指針の改正、複数の関係機関との調整の必要性などの理由により、研究スケジュールと内容も大きく変更せざるを得なかった。しかし、医療機関が保存する診療録を歴史的に価値のあるものとして長期的に保存する仕組みはまだほとんど整備されておらず、歴史学研究者が利用するケースも国内ではまだ数少ないのが現状である。本研究では、これまで歴史資料としての利用が困難であった診療録の整備と基礎的なデータ集計を行い、先行研究の知見や関連する医療機関で作成された診療録と照らし合わせながら考察することで、診療録を用いた精神医療史研究の持つ可能性を示すことができた。国府台陸軍病院診療録に関しては、経年的な変化や、治療・診断過程の詳細な分析、退院後に長期療養施設への転送につながったケースとそうでないケースの比較などを通じて、戦時精神医療の実態をより明らかにすることが期待できる。

〔引用文献〕

- 浅井利勇編『うずもれた大戦の犠牲者 国府台陸軍病院・精神科の貴重な病歴分析と資料』国府台陸軍病院精神科病歴分析資料・文献論集記念刊行委員会、1993年。
中村江里『戦争とトラウマ 不可視化された日本兵の戦争神経症』吉川弘文館、2018年。
細淵富夫・清水寛編『資料集成精神障害兵士「病床日誌」』全2巻、2016～2017年。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

Nakamura, Eri, "Psychiatrists as Gatekeepers of War Expenditure: Diagnosis and Distribution of Military Pensions in Japan during the Asia-Pacific War." *East Asian Science, Technology and Society* 13, no.1 (2019): 57-75. 【査読あり】

中村江里「総力戦と日本の軍事精神医療 新発田陸軍病院入院患者の事例を中心に」
『年報日本現代史』第22号、現代史料出版、2017年7月、139 - 174頁。【査読なし】
後藤基行、中村江里、前田克実「戦時精神医療体制における傷痍軍人武蔵療養所と戦後病院
精神医学 診療録に見る患者の実像と生活療法に与えた影響」『社会事業史研究』第50
号、2016年9月、143 - 159頁。【査読あり】
中村江里「戦争と精神疾患の『公務起因』をめぐる政治 - 日本陸軍における戦争神経症と
傷病恩給に関する考察を中心に -」『精神医学史研究』第20巻1号、2016年6月、37 - 41
頁。【査読なし】
竹島正、後藤基行、中村江里、古屋龍太「傷痍軍人武蔵療養所の歴史 - 戦後の病院精神医学
への影響も含めて」『日本社会精神医学会雑誌』第25巻2号、2016年、149-156頁。【査読
なし】

〔学会発表〕(計9件)

中村江里「軍事精神医療に関するアーカイブズの概要と研究状況」(第22回日本精神医学史学
会 シンポジウム「精神医療史とアーカイブズ - 診療録等の保管と研究利用の現状」、西南学
院大学、2018年11月10日)

Nakamura, Eri. "Broken Soldiers in the "Emperor's Army": Medical / Social / Individual
Recognition of Trauma during and after the Asia-Pacific War." (Dialogue NJI Symposium,
October 6th, 2018)

Nakamura, Eri. "Male Hysteria in Japan: Masculinity, Trauma and Military Psychiatry
during the Asia-Pacific War." (Asian Studies Association of Australia Conference 2018,
University of Sydney, July 4th, 2018)

中村江里「感情を管理される日本軍兵士たち 軍事化されたマスキュリニティと戦争神経
症」(一橋大学ジェンダー社会科学センター第42回公開レクチャー、一橋大学、2018年6
月27日)

Nakamura, Eri. "Broken Soldiers in the "Emperor's Army": War Neurosis and Military
Psychiatry during the Asia-Pacific War." (The 7th Keio Symposium on Bridging
Humanities, Social Sciences and Medicine: Technologies of Self-Care, Screening, and
Surveillance, Keio University, June 16th, 2018)

Nakamura, Eri. "Psychiatrists as Guardians of War Finance: Distribution of Military
Pensions during and after the Asia-Pacific War." (AAS-in-Asia Conference 2017, Korea
University, Seoul, Korea, June 25th, 2017)

Nakamura, Eri. "Who Deserves War Pension?: The Asia-Pacific War and Psychiatric
Casualties in Japan." (The Eighth Meeting of Asian Society for the History of Medicine,
Academia Sinica, September 30th, 2016)

中村江里「精神科診療録を用いた歴史研究の可能性と課題 戦時下の陸軍病院・傷痍軍人療養
所における日誌の分析を中心に」(シンポジウム「近代日本の日記文化と自己表象」、明治
学院大学、2016年9月18日)

Nakamura, Eri. "Invisible' War Trauma in Japan: Medicine, Society and Military
Psychiatric Casualties." (The Third ISA Forum of Sociology, Wien University, July 11th,
2016)

〔図書〕(計4件)

王文基, Yu-chuan Wu 編, 北中淳子, 兵頭晶子, 呂寅碩, 王文基, Yu-chuan Wu, 劉峻, 鈴木
晃仁, 中村江里, Harry Yi-Jui Wu, 姜學豪, Huang Hsuan-Ying 著 『精神科學與近代東亞』聯
經出版、2018年12月、305 - 337頁。

中村江里『戦争とトラウマ 不可視化された日本兵の戦争神経症』吉川弘文館、2018年1月、320頁。

中村江里編・解説『資料集成 精神障害兵士「病床日誌」』第3巻、六花出版、2017年12月、170頁。

田中祐介、柿本真代、河内聡子、新藤雄介、中村江里、川勝麻里、大野ロベルト、中野綾子、康潤伊、堤ひろゆき、徳山倫子、磯部敦、高媛、大岡響子、宮田奈奈、西田昌之、松園斉、島利栄子著『日記文化 から近代日本を問う』笠間書院、2017年11月、139 - 162頁。